

令和 2 年 9 月 11 日現在

機関番号：34605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04656

研究課題名(和文) 社会情動的スキルと認知的スキルを相互的に育む日本版エシコウルの開発

研究課題名(英文) Development of Preschool Education that Mutually Fosters Social Emotional Skills and Cognitive Skills

研究代表者

中村 恵 (Nakamura, Megumi)

畿央大学・教育学部・准教授

研究者番号：90516452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：社会情動的スキルと認知的スキルを相互的に育む一貫した学習環境の要件は、子どもを「学ぶことによって自らの知識・スキルを構築していける人」として保護者や教師と対等な存在と位置付けることである。子どもが発見や気づきを残すことができるアプリを開発し、デジタルプレイの中で生成した記録からインターネットのクラウド上にポートフォリオを共創するシステムは、保育者による学びのサポートに繋がった。学びの中心にある子どもの興味や楽しさを起点として、実生活で必要となる知識やスキルの必要性を子どもが感じることができた。今後の課題は、スモールステップでの目標設定や確認を子ども保護者と共に相談しながら行うことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

主体的な学びを意識した就学前教育において、誕生後からの子どもの育ちと連携する一貫した学習環境を構築し、カリキュラムデザインを行った。従来の日本の幼児教育においては、子どもの社会情動的スキルは気質や性格として理解され、スキルを育てる意識は低く、子育て支援と就学前教育とが連携したカリキュラムデザインはあまり見られない。またフィンランドの調査で得られた平等と個を尊重しあい、参加を重んじる姿勢や、同行調査を行った4歳児健診におけるワンストップ型子育て支援の場のネウボラと就学前施設の連携の中での子どもや保護者の参加は、日本の保育での家庭や専門機関との連携のあり方に大きな示唆を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：Social emotional skills and cognitive skills are nurtured in a mutually coherent learning environment.Children are "people who can build their own knowledge and skills by learning", and they are equal.  
I created an app that children themselves can use to discover and leave.A child's digital play produces a record.This system co-creates a portfolio on the internet cloud.This helped the teachers to support children's learning.  
The children were able to feel the need for the knowledge and skills required in real life, starting from the interest and enjoyment of the children at the center of learning.It was found that the task was to consult and set goals and confirm at the small steps together.

研究分野：幼児教育学

キーワード：就学前教育 ネウボラ カリキュラム 社会情動的スキル 学習環境 デジタルプレイ

## 様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### 研究の学術的背景

#### (1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

日本の幼児教育は、「心情・意欲・態度」を「環境を通して行う教育」により育むこと、子どもの意欲や興味・関心を大切にしてきた。いわゆる非認知能力を従来から育ててきたともいえる。一方で、粘り強さや、挑戦する気持ち等の姿勢などは気質や性格によるものと捉えがちであったが、幼稚園教育要領改訂に向けては、これらをあえて「スキル」と位置づけ、幼稚園修了時まで育てたい姿として明示される予定である。国外では、ペリー就学前計画を元に、ヘックマンにより質の高い就学前教育において身についた「潜在能力」は後まで継続することが示された。OECD は、子どもの目標を達成する力、他者と協働する力、情動を制御する力の強化を促す為に、家庭、学校、地域社会等一貫性のある学習環境の可能性を示している。本研究では、一貫性のある学習環境を構築するために、ネウボラ(フィンランドの地方自治体が設置する母子支援地域拠点の名称)による誕生から就学前までの一貫した子育て支援における医療的観点と就学後の資質能力の育成を支える社会情動的スキルと認知的スキルの相互作用を育む教育的観点を融合した「日本版エシコウル(フィンランド語で就学前教育を意味する)」のカリキュラムをデザインする。その際、保育実践の記録としてのポートフォリオの共有とリフレクションを経て次年度以降のカリキュラムへとブラッシュアップする手法を用いるものである。

#### (2) これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、研究成果の発展内容

幼児の Media Awareness(情報への認識)を促すプロセスにおいて、幼児の思いや学びの構えがどう変化したのかに注目することにより、学ぶ意欲や課題発見、問題解決する資質や能力等まで含めた「学び」が可視化され、学校教育段階における「気づき」に繋がる対象への認識の芽生えが見られた研究成果<sup>1</sup>をさらに発展させるものである。

幼児自らの気づきや発見を可視化できるアプリケーションを開発・実践した研究<sup>2</sup>では、学びを共有し、言語化する過程で、非認知能力につながる粘り強く取り組み、挑戦しようとする姿が見られた一方で、保育者からは、子どもの取り組む姿勢に対して本来の気質や性格に由来するとの発言が多かった為、気質や性格を培うであろう家庭における子育て支援と学びを育む教育の視点を融合させることが有用ではないかと考えた。そこで、誕生から就学前教育までの一貫した子育て支援で有名なフィンランドの「ネウボラ」の日本版(名張市や千歳市など)において、主要な役割を果たしている乳幼児健診等を行う保健師等の医療関係者と協同で一貫した学習環境を提案する。

奈良市立こども園カリキュラム策定に関わった奈良市立幼稚園におけるアクションリサーチにおいて、幼児の Media Awareness を意識した保育実践におけるドキュメンテーションを作成した際、社会情動的スキルと認知的スキルが互いに作用しあうことが可視化された。その際、培われた幼児の Media Awareness(情報に対する認識)が社会情動的スキルと認知的スキルの創出や相互作用をさらに強化するエンジンの役割をしているのではないかと考えた。

ドキュメンテーションの共有・リフレクションのプロセスで、年少児として年長児の活動を体験したことを前提とした次年度カリキュラムへのブラッシュアップが行われた。そこで、共有とリフレクション機能を強化したポートフォリオシステムを構築し、Media Awareness が、社会情動的スキルと認知的スキルが相互的に作用するためのエンジンの役割を担うことを明らかにする。

### 2. 研究の目的

本研究は、主体的な学びを意識した就学前教育において、誕生後からの子どもの育ちと連携する一貫した学習環境を構築し、Media Awareness が子どもの社会情動的・認知的スキルを相互的に高めるエンジンの役割を担うことを明らかにしながらカリキュラムデザインを行う。現状では、子どもの社会情動的スキルは気質や性格として理解され、スキルを育てる意識は低く、子育て支援と就学前教育とが連携したカリキュラムデザインはあまり見られない。そこで、以下3点を明らかにする必要がある。

(1) 社会情動的スキルと認知的スキルが相互的に作用しあう、誕生から就学前教育までの一貫した学習環境に必要な要件

「日本版ネウボラ」を実践している名張市のネウボラ推進担当保健師にインタビューを行い、就学前教育と連携して子どもの育ちを支援したい内容を明らかにする。また、保護者のニーズをインタビューや質問紙調査で明らかにする。

(2) 学校教育における資質・能力の育成を支える社会情動的スキルと認知的スキルが相互的に作用しあうことを可視化するポートフォリオシステムの実現方法

研究分担者として開発を行ったアプリケーションを再開発して、Media Awareness の可視化、共有・リフレクション機能を強化し、保育実践の振り返りツールとして活用することにより、社会情動的スキルと認知的スキルが相互的に作用しあうことを子どもの姿から明らかにし、子ども保育者保護者が共有できるポートフォリオシステムの機能をデザインする。

(3) 日本版エシコウル(就学前教育)のカリキュラムデザイン

フィンランドのネウボラとエシコウルの連携、アウトカムとしての資質能力とのつながりを促すカリキュラムについて、文献や視察調査において明らかにする。それらを踏まえて、先行実施されている日本版ネウボラと学校教育を繋げる日本版エシコウルのカリキュラムデザインを

行う。

### 3. 研究の方法

第一に、フィンランドにおける、誕生から就学前教育までの一貫した子育て支援の場である「ネウボラ」と主体的な学びを意識した就学前教育の場である「エシコウル」の調査を行い、誕生後からの一貫した学習環境を構築する知見を得る。

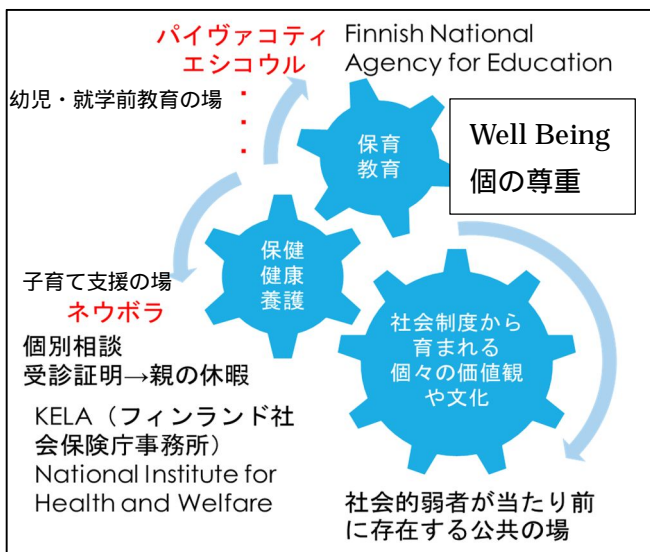
第二に、これらの成果をもとに、子ども自らが遊びに位置付けることができ、子ども自身が遊びの中での発見や気づきを記録し、保育者やクラスで容易に共有できるタブレット端末用のアプリケーションを開発し、これを中核にポートフォリオシステムを構築する。さらに構築したポートフォリオシステムが機能するカリキュラムデザインを行う。

具体的には、以下の6点の課題を設定する。

- 1) フィンランドの就学前教育と子育て支援についての調査及び内容の検討
- 2) 名張市のネウボラ推進担当保健師へのインタビューによる就学前教育と連携して子どもの育ちを支援したい内容の精査
- 3) 誕生後から就学までの一貫した学習環境の提案
- 4) Media Awareness を可視化するアプリケーションの開発
- 5) 開発するアプリを中核とする社会情動的スキルと認知的スキルが相互的に作用するポートフォリオシステムの構築と評価。
- 6) 日本版エシコウル（就学前教育）のカリキュラムデザイン、及び幼稚園における実践の考察

### 4. 研究成果

1) フィンランドでは、胎児として母体に宿った瞬間から一人の国民として社会から受け入れられることを象徴している場がネウボラである。妊娠がわかった時から家族を支援する出産ネウボラから子どもネウボラへの継続が一貫した学習環境を支えている（図1）。その根底にあるのは、Well Being への意識であり、一人一人を平等に尊重しあう姿勢である。その意識は幼児・就学前教育の場でも引き継がれている。2016年に改訂されたナショナルカリキュラム<sup>3</sup>において、Basic education（日本の小学校から中学校にあたる7～6歳）では、「人としてまた社会の一員としての育ち」につながる横断的能力の領域として、思考と学びにつながる学習 文化的能力、相互作用および自己表現 自己管理・日常生活の管理 マルチリテラシー ICT コンピテンシー 働くための能力と起業家精神 社会参加、関与、持続可能な未来の構築 が示されている。Pre-primary education（6歳）では を統合した6領域で、ECEC（0～6歳）ではさらに を省略した5領域で示されている。これらのナショナルカリキュラムに対して、地域ごとにローカルカリキュラムを策定し、教育的活動は全ての子どもに対して作成される個別教育計画（Vasu）と絡み合って計画される。つまり、個人の成長をベースにグループ計画を立てるのである。そして、年に2回、教師と保護者がこのVasuについて話し合うミーティングがある。Vasu についての話し合いでは、子ども本人の評価も交えながら、前回のVasu ミーティングでは、何を目標にしていたかを確認し、それがこの半年で達成できたかを話し合い、新しい教育目標を設定し、最後に何か心配事や園への不満がないか等丁寧な聞きとりがある。Vasu の評価として教師が活用しているアセスメントシートは地域毎に実情やニーズに応じて作成して、ユバスキュラ市においては、社会情動的スキル 認識と運動能力 言語能力と読むことへの準備性（外国にルーツを持つ子どもの第2言語としてのフィンランド語の評価） 数学に対する準備性の4分類の下、それぞれの細項目について、「できる+、まだできない-、芽生え始めたばかりの能力- +、大人のサポートがあればできる+ -」という評価を、秋・春の毎年2回保育者が行い、保護者とのミーティングのベースとなっている。ここでの評価の視点が、「できる・できない」ではなく、今子どもが、スキルを身につけるプロセスにおいてどの地点にいるのを明確にしているので、援助の手立てや目標を立てやすくしている。子どもが人と関わる際や、物事に取り組む際の姿勢や態度をスキルとして捉えて明確にし、それらを主体的に身につけていくための具体的方策を示したもので、必要なスキルを子ども自身が「必要だ」と感じて自らが身につけようとするのを大切にしている。そのためのツールは教師が適当な方法で提示し、それを使うかどうかは子どもに委ねられている<sup>4</sup>。このスキリングの考え方は日本版エシコウルの開発に対して重要な示唆を与えた。



フィンランドでの健診は、出生から就学前まで合計15回あり、大部分は保健師であるネウボ

ラナースが行うが、4ヶ月、18ヶ月、4歳健診は、総合健康診査（医師と保健師であるネウボラナースによる共同診査または個別診査）が行われる。特に、満4歳を発達の重要な節目と考えていて、健康診査の項目が最も多く、親子関係、子どもの社会的発達、学習困難、子どもの長所、及び両親の健康に関わる生活習慣を取り上げ、定期的な歯磨き、健康的な食生活、口腔ケアにおける両親自身が行っているケアなどについても話し合われる。また、両親の許可を得た上で、総合健康診査前に、就学前施設の職員による評価を得るように手配される。本調査において4歳児健診に同行調査した結果、ネウボラナースが、家族の健康状態や生活習慣について、両親と子どもがどのように表現するかを捉え、子どもだけではなく家族全体という観点から変化を話し合う姿勢が明らかになった。さらに、就学前施設の職員による評価項目は、ユバスキュラ市の場合には、子どもの集団行動およびやりとりの様子、子どもの遊び方や子どもの興味の対象、自由な場面および指導がある場面での子どもの運動、および自分自身や自分の環境の認識の仕方、日常の活動、感覚機能および刺激への反応など、その他の特記事項、子どもに対し、すでに発達の支援のために開始された検査またはリハビリ措置の有無（ある場合は具体的に記載）であった。集団生活の場での社会性、友達関係、怒りの感情表現について、総合的な成長と発達を評価し支援の必要性を早期に確認することにつなげている。特に、遊びの場面における子どもの長所と発達に関する両親と保育所の気づきは重要であることから、総合健康診査では、保育所に対して、必要とされる支援を両親の書面による許可を得て、フィードバックされる。どの場面においても、両親や子どもが常に参加し、主体的に関わることを尊重されていることが、個々のWell Beingへの意識を高める一つの要因になっていることが示唆された。

2) 名張市の担当保健師に対する半構造化インタビューにより、保健医療の観点から就学前教育と連携したい内容としては、就学前施設における集団生活や活動における社会情動的スキルに関するものが多いことが明らかになった。そこで、就学前教育における「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする」「知識及び技能の基礎」「気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする」「思考力、判断力、表現力等の基礎」心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」を育む過程で有用な保健医療の観点をスキリングの手法により整理した。しかし日本の保健システム下では、名張市においてもフィンランドのように子ども本人や保護者が保健師や医師と共に評価に参画することはない。あくまで「診断される」「判別される」という受け身の姿勢であるために、「レッテルを貼られる」という意識が強く、スキリングの手法をうまく活かせない実態も明らかとなった。

3) 日本における一貫した学習環境につなげるために、就学までに行われる健診において、保健師が幼児教育における資質・能力や幼児期の終わりまでに育てたい10の姿を方向目標として捉えて保護者と共有し、養護の観点についてのアドバイスを行うことにより、資質・能力という共通の視点で子どもの姿を捉えることで、誕生からの一貫した学習環境を整えることを提案した。一方、幼児教育施設においては、スキリングの手法を取り入れ、一人ひとりに応じた援助や留意点、保育のねらいを検討する際に実現可能なスモールステップでスキルを高める視点をを用いて、スキルを高めるための方法は子どもと相談することを提案した。その結果、今までは「気になる子」として一括りにしてきた子どもの姿を、一人ひとり異なる道筋を辿って成長する過程として捉えることができ、保育者の幼児理解が深まったことにより、就園前までに培われていた資質・能力の芽生えを汲み取ることができるようになり、一貫した学習環境につなげる可能性を見ることができた。

4) タブレット端末を用いた「遊び」を従来の幼児教育において展開されてきた伝統的な遊びの枠組みで捉えようとする、〇〇遊びという名の早期教育または就学準備教育が、遊びにおける学びを阻害するような「娯楽活動」等のいずれかに位置づけられがちである。しかし、2017年改訂の幼稚園教育要領に示された「情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること。」を実現しようとする取り組みとしてグローバル教育の観点<sup>5</sup>や、デジタルストーリーテリングを用いたもの<sup>6</sup>等に取り組んできた。それらを踏まえて、本研究では幼児がテクノロジーやデジタルメディアコンテンツを主体的に使用して「遊ぶ」ことを、新たな遊びの枠組みの「デジタルプレイ」として捉えることにした。さらに、子どもの情報に関する認識（Media Awareness）が顕在化することを資質・能力の一つとして保育者が意識すると、操作することや受動的な刺激そのものを楽しむことから、遊びを通して発見したことや気づいたことを共有するツールとして位置付けていく子どもの姿を見出した。そこで、子ども自ら操作し、遊びの中で芽生えた学びをクラウド上で可視化できるアプリケーションの開発を行った<sup>7</sup>。これは、2015年度から幼児の

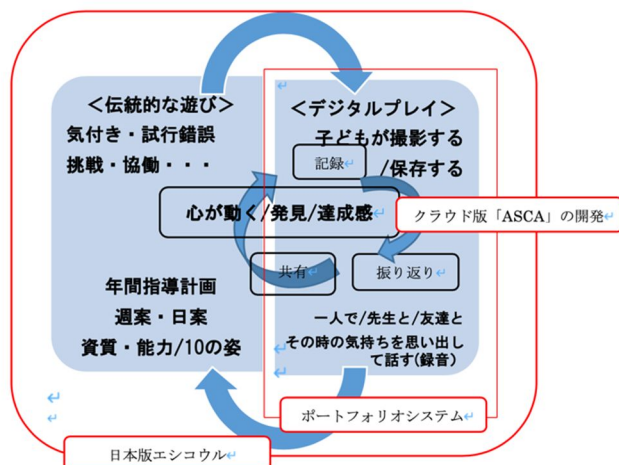


図2：開発デザインの概観

育ちと保育者の保育の支援を行うためのタブレット端末アプリとして開発した「ASCA( Archives Sharing and Creating Anytime for preschool)」を発展させたものである。従来は、職員室など保育者が使用するサーバ用パソコンと同じ LAN に接続することでのみ利用できる限定されたものを、インターネットのクラウド上のサーバで管理することで保育者と研究者の情報共有が進み、可視化された情報の解釈や考察をより深めることができ、次の手立てや環境の再構成をタイミング良く行うことができた。

5) 開発アプリを子どもがデジタルプレイとしての遊びに位置付けることにより、子どもや保育者、保護者の Media Awareness がより顕在化した。その結果、子どもの姿を心情・意欲・態度という視点に加えて、「情報の位置づけ方」という視点でも捉えることにより、社会情動的スキルと認知的スキルが相互的に育まれることに、より明確に気づくことができた。さらに、子どもがアプリを用いて生成した記録を基点に、子どもと共にポートフォリオを創り出す行為を通して、一人一人の子どもに対する理解を深め、子どもが日常の生活の中でスキルを育む経験ができる環境をデザインする(図2)ことにつながった。

6) 1)~5)で得た知見を基に、奈良県内の研究協力園で年間を通してデジタルプレイを取り入れたカリキュラムデザインを行い、ポートフォリオシステムを運用した。その過程で、保育者の子どもの捉え方や聴き方、応え方など、意識の変容が見られた。その結果、子ども自らの必要感や有用感を感じられるような仕組みが重要で、一人ひとりの姿を捉えてタイミングを逃さずフィードバックし、子どもや保護者と共にスキリングについて話し合うためのツールとしてポートフォリオシステムが機能した。その際にスキルとして捉えたのが、幼稚園教育要領等で示された資質・能力や幼児期の終わりまでに育みたい10の姿と合わせて、OECD が定義した、基礎的認知能力(パターン認識、処理速度、記憶)、獲得された知識(呼び出す、抽出する、解釈する)、外挿された知識(考える、推論する、概念化する)からなる認知的スキルと、目標の達成(忍耐力、自己抑制、目標への情熱)、他者との協働(社交性、敬意、思いやり)、感情のコントロール(自尊心、楽観性、自信)からなる社会情動的スキルである<sup>8</sup>。これらのスキルを、保育者がアプリ内で子どもが記録したものに、タグ付けする機能を強化したポートフォリオシステムにおいて、認知的スキルと社会情動的スキルが、情報に対する認識(Media Awareness)の仲立ちにより、相互的に育まれることが明らかとなった。

## 5. まとめと課題

フィンランドにおける調査において、子ども、保護者、教師それぞれの「個」が平等に尊重されていることにより、参加(participation)が有機的に機能していた。2016年のナショナルカリキュラムの改訂においては、子どもを「知識・スキルを教える対象」としてではなく、「学ぶことによって自らの知識・スキルを構築していける人」として保護者や教師と対等な存在として位置付けている。これが誕生後からの一貫した学習環境のベースとなる考え方である。学びの中心には 子どもの興味や楽しさ・実生活で必要となる知識やスキルがあり、それを支えるのが、 学びのサポート、 評価、 学びの環境、 目的、 内容、 評価基準である。

本研究においては、ポートフォリオシステムにより、を顕在化し、保育者による に繋げた。日本版エシコウルとして自ら活動を選択し自律的に行動できる時間や空間を確保する工夫をし、多様な成長過程にいる子どもの今いる位置を、子ども本人や保護者、教師がともに確認しながら目標を共有していく意識を持つことが重要で、タブレット端末や、アプリ等の ICT を「デジタルプレイ」という枠組みで活用することが有用である。しかし、 から についての詳細化はできていない。今後、研究協力園における実践を通して、子ども自らの知識・スキルを構築するという観点での評価につなげていきたい。

<sup>1</sup> 中村恵(2014)「幼児期から学童期を繋げる学びのアセスメントの検討」『日本教育工学会論文誌』38 巻 Suppl 号 pp33-36

<sup>2</sup> 松山由美子 堀田博史 佐藤朝美 奥林泰一郎 松河秀哉 中村恵 森田健宏 深見俊崇(2016)「保育現場での活用を想定した幼児向けアプリの評価観点の検討」『日本教育工学会論文誌』40 巻 Suppl 号 pp117-120

<sup>3</sup> Finnish National Core Curriculum for Basic Education 2014

Finnish National Core Curriculum for Pre-primary Education 2014

Finnish National Core Curriculum for Early Childhood Education and Care 2016

<sup>4</sup> 中村恵 小柳和喜雄 古川恵美(2019)「社会情動的スキルを育む就学前教育の在り方～フィンランドの幼児教育に学ぶ～」畿央大学紀要 16 巻 2 号 pp19-33

<sup>5</sup> 森田健宏 堀田博史 中村恵 奥林泰一郎 佐藤朝美 深見俊崇 松河秀哉 松山由美子 笠井正隆(2018)「幼児へのグローバル教育の導入を目指すためのメディア利用の試み」『日本教育メディア学会研究会論集』44 巻 pp105-112

<sup>6</sup> 佐藤朝美、松河秀哉、椿本弥生、荒木淳子、中村恵、松山由美子、堀田博史(2020)「園生活の保護者の振り返り支援を目的としたデジタルストーリーテリング・ワークショップの開発と評価」『日本教育工学会論文誌』43 巻 Suppl.号 pp. 61-64

<sup>7</sup> 中村恵(2018)「主体的な学びを可視化する ICT 機器の活用」『乳幼児教育学会第 28 回大会予稿集』自主シンポジウム 1-6

<sup>8</sup> OECD(2018)「社会情動的スキル 学びに向かう力」明石書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中村恵 小柳和喜雄 古川恵美	4. 巻 16
2. 論文標題 社会情動的スキルを育む就学前教育の在り方 ~フィンランドの幼児教育に学ぶ~	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 畿央大学紀要	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤朝美, 松河秀哉, 椿本弥生, 荒木淳子, 中村恵, 松山由美子, 堀田博史	4. 巻 43
2. 論文標題 園生活の保護者の振り返り支援を目的としたデジタルストーリーテリング・ワークショップの開発と評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森田健宏 堀田博史 中村恵 奥林泰一郎 佐藤朝美 深見俊崇 松河秀哉 松山由美子 笠井正隆	4. 巻 44
2. 論文標題 幼児へのグローバル教育の導入を目指すためのメディア利用の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育メディア学会研究会論集	6. 最初と最後の頁 105-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 社会情動的スキルを育む保育～キッズスキルに学ぶ～
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村恵, 小柳和喜雄, 古川恵美
2. 発表標題 幼児期と児童期を繋ぐ主体的な学びを創出するスキル～Media Awarenessに注目して～
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村恵, 古川恵美, 岩坂秀巳, 石崎優子, 池田友美, 鯉坂誠之, 福地成
2. 発表標題 子どもの自立に繋がる支援とは～ネウボラ4歳児健診を通しての検討～
3. 学会等名 日本小児精神神経学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村恵, 小柳和喜雄, 古川恵美
2. 発表標題 幼児期の遊びにおけるデジタルプレイの創出～Media Awarenessに注目して～
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 保育でのタブレット端末等の活用～学びの芽生えを可視化するタブレット端末等の活用～
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 社会情動的スキルと認知スキルを相互的に育む学習環境デザインの検討（ネウボラからの示唆についての口頭発表）
3. 学会等名 日本保育学会第71回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村恵 小柳和喜雄
2. 発表標題 "フィンランドにおけるメディア教育 National Core Curriculum for Pre-Primary Education 2014 より"
3. 学会等名 日本教育工学会第34回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 社会全体で育む情動的スキル~フィンランドの幼児教育システムからの示唆~
3. 学会等名 日本子ども学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 フィンランドの幼児教育 ネウボラが果たす役割
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 自主シンポジウムICT やクラウドを活用した保育記録 仕事の効率化および保育の質向上にむけた取り組みから
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 学びを織りなす幼児教育のデザイン
3. 学会等名 日本保育学会 自主シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 学びの芽生えを育む環境構成デザイン
3. 学会等名 日本保育学会 口頭発表
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村恵 小柳和喜雄 古川恵美
2. 発表標題 社会情動的スキルと認知的スキルを相互的に育む学習環境デザインの検討 幼児のMediaAwarenessに注目して
3. 学会等名 日本教育工学会 口頭発表
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村恵
2. 発表標題 社会情動的スキルと認知スキルを相互的に育む環境構成デザインの検討（保育におけるICTの活用についての口頭発表）
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 口頭発表
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中村 恵、水田 聖一、生田 貞子（編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 保育内容総論	

1. 著者名 吉田貴子、水田聖一、生田貞子（編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 保育の原理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>オンラインシンポジウム「子どもとメディア-幼児教育における研究・実践の最前線-」  <a href="https://www.blog.crn.or.jp/event/02/02/13.html">https://www.blog.crn.or.jp/event/02/02/13.html</a>  園でのタブレット「ASCA」活用事例  （シンポジスト）  堀田博史（園田学園女子大学教授）  田爪宏二（京都教育大学准教授）  森田健宏（関西外国語大学教授）  松山由美子（四天王寺大学短期大学部教授）  中村恵（畿央大学准教授）  薛 燁（米国・メンフィス大学准教授）  榊原洋一（CRN所長、お茶の水女子大学名誉教授、ベネッセ教育総合研究所常任顧問）</p>
--

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	小柳 和喜雄  (Oyanagi Wakio)  (00225591)	奈良教育大学・教職開発講座・教授    (14601)	
研究 分 担 者	古川 恵美  (Furukawa Emi)  (20636732)	畿央大学・教育学部・准教授    (34605)	